令和六年八月一日発行　毎月一回一日発行

書道研究誌

書の光

8
2024

Vol.672
宮城野書道会

漢詩を味わう

第181回

旅夜書懐（りょやおもいをしるす）　杜甫

細草微風岸　細草　微風（びふう）の岸
危檣独夜舟　危檣（きしょう）　独夜の舟
星垂平野闊　星垂（た）れて　平野闊（ひら）く
月湧大江流　月湧（わ）きて大江流る
名豈文章著　名は豈（か）に文章にて著（あらわ）れんや
官応老病休　官は老病に応じて休む
飄飄何所似　飄飄（ひょうひょう）　何の似たる所ぞ
天地一沙鷗　天地の一沙鷗（いちさおう）

細い草がそよ風に吹かれる岸辺
高い帆柱の小舟に、ひとり眠られずにいる。
星は地上の野原に降り注ぐようにたくさん輝いて、
湧きかえる波に月影を煌かせながら揚子江は流れ続ける。
人の名声などというものは、文学などで世に現れるはずはない。
官職もこうして年老いて病気がちとあらば、きっとこのまま終わりになるに違いない。
風のままに漂い続けるこの身は、いったい何に似ているだろうか。
天地の間をさまよい渚に休むカモメのようだ。

《書　懐》思いを書き留める。
《細　草》背の低い草。
《危　檣》高い帆柱。
《星　垂》満天の星が地上を蔽う。
《平野闊》平野が広々と続く。
《月　涌》月が川面に反射して水中より湧くよう見える。

前号は岑参が杜甫に寄せた詩「寄左省杜拾遺」を取り上げました。今回の詩は杜甫の詩で、左拾遺を辞してから約七年後の晩年に詠まれた詩です。杜甫は洛陽に左遷されたのち、司功参軍の官を棄て、成都の浣花渓のほとりに草堂を築き、浣花草堂で落ち着いた生活を送っていました。しかしそれまで援護してくれた長官厳武が亡くなり暮らしにくくなり、杜甫にとっては不本意だったようですが、約五年間暮らした成都を離れ、長江を下る舟旅の途中で詠んだ詩です。

詩は五言律詩で、四聯で構成されています。前半は周囲の風景描写、後半は心境を述べています。

第一聯は、そよ風に吹かれて震える細草と、高い帆柱の意味の危檣、そして独り寝つけずにいる小舟、というように「細・危・小」の字を用いて、不安でなんとなく心細い心象を暗示しています。第二聯は、星の煌めく大空のもとに拡がる平野と、月影を煌かせながらとうとうと流れる長江の姿を詠います。逞しい自然と弱いものの対比から、孤独感や寂寥感がにじみ出ています。

後半はそういう夜景を一人で見ているうちに浮かんだ感慨です。「人間の名声というものは、どうして詩や文章の才能によって認められる筈があろうか、官職に就いて活躍しなければならないのに、こうして病気がちではこのまま終わりに違いない。」

文学上の名声もなく、官職もだめ。そして最後は自分をあざけるようにカモメにたとえて結んでいます。自分を客観視して描き、一種の諦観に似た落ち着きのある詩に仕立てています。

若山牧水の「白鳥は　かなしからずや　空の青　海のあを　にも染まずただよふ」の歌が、最後の聯に重なります。

この詩が詠まれた三年前に心の拠り所としていた李白が亡くなり、李白と違ってこの頃はまだ詩人としての名声もなく、成都を離れて気弱になっていたようです。一方で湖北省の夔州（きしゅう）という長江沿いの街についた杜甫は二年間で、四百五十首もの詩を詠んでいます。現在残っている詩は約千五百首余りで、約三分の一に近い詩を夔州で詠んだことになります。まさに後世に「詩聖」と言わしめた杜甫の集大成となった晩年でした。

杜甫はこの詩を詠んだ五年後に、長安に帰る舟の中で亡くなりました。

参考文献：唐詩鑑賞辞典（東京堂出版）・偉大なる憂鬱「杜甫」（平凡社）

山僧　碁に対して坐す　局上　竹影清し　竹に映じて人の見る無く　時に聞く　子を下す聲

《大意》山寺の和尚が碁盤に向かって坐っている。盤上にゆれる竹の葉かげが清々しい。竹におおわれて見る人もなく、時おり聞こえてくるのは、パチリと石を打つ音のみ。（白居易詩・池上二絶 其一）

吾が心は秤の如く人の為に軽重を作さず　※秤は稱（称）の俗字

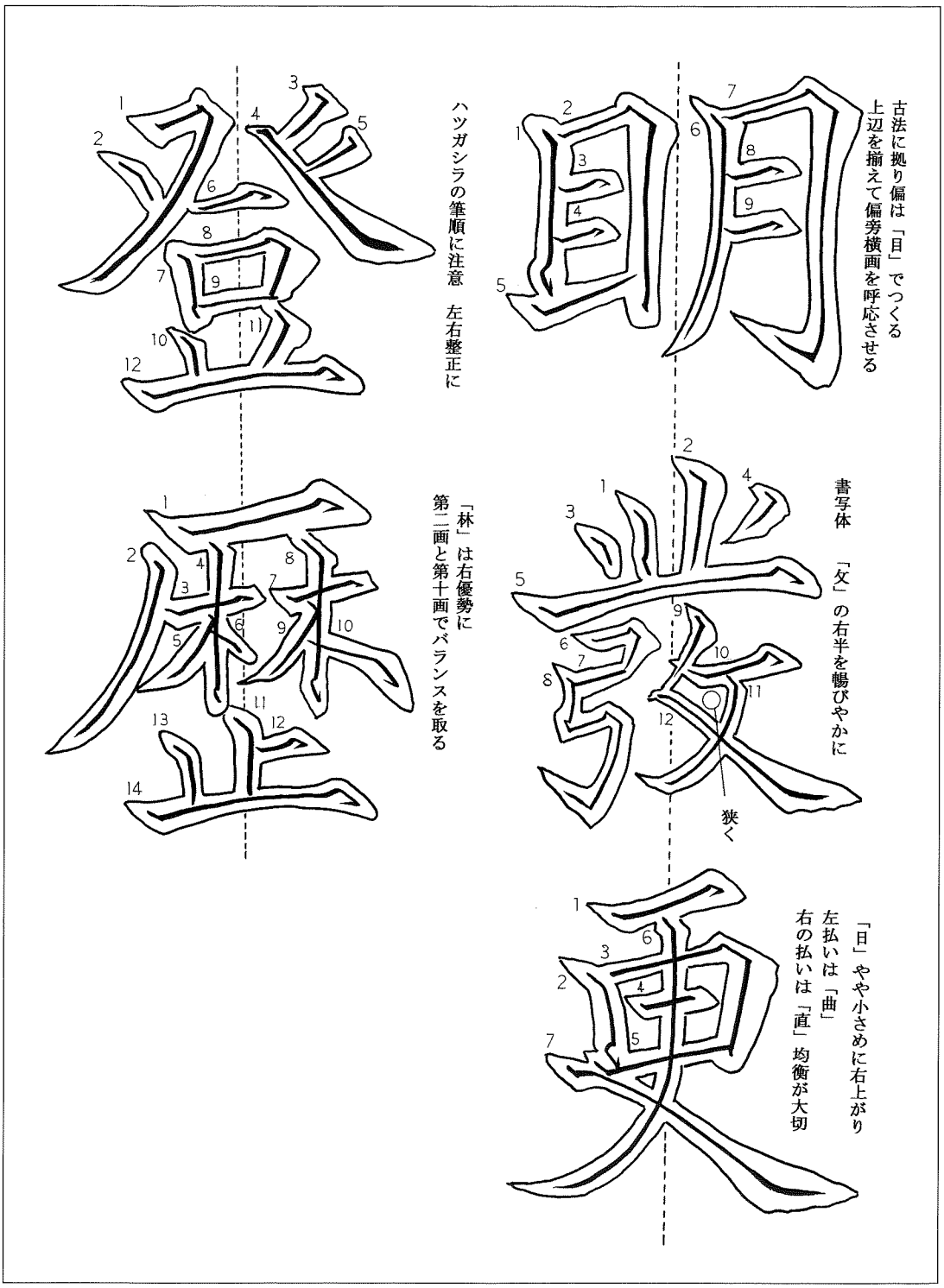
《大意》自分の心は秤のように正直であるから、人の為に軽くなり重くなることはなく、常に公平である。（諸葛亮）

読み　明發（めいはつ）　更に登歴（とうれき）せん（明日の夜明けには、更に山を踏みわけて確かめよう。）

佐藤象雲書

一般部規定課題出品について

・規定課題は段級の区別なく、前頁掲載の五言句となります。
・初段以下の方に限り、前半二文字または後半三文字でも構いません。
・規定課題（楷書）の出品はひとり一点に限ります。



連月課題

王維詩「藍田山の石門精舎」（後半）

朝梵林未曙
朝梵　林　未だ曙けず
夜禪山更寂
夜禪　山　更に寂たり
道心及牧童
道心　牧童に及び
世事問樵客
世事　樵客に問ふ
暝宿長林下
暝に宿る　長林の下
焚香臥瑤席
香を焚きて　瑤席に臥す
澗芳襲人衣
澗芳　人衣を　襲ひ
山月映石壁
山月　石壁に映ず
再尋畏迷誤
再び尋ぬるに迷誤を畏れたれば
明發更登歴
明發　更に登歴せん
笑謝桃源人
笑ひて謝す　桃源の人
花紅復來覿
花の紅なるとき　復た來りて覿はん

行書

草書

※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

隷書

次号課題

笑って謝す　桃源の人

ペン字部昇格試験課題（9月3日〆切）

細字部昇格試験課題（9月3日〆切）

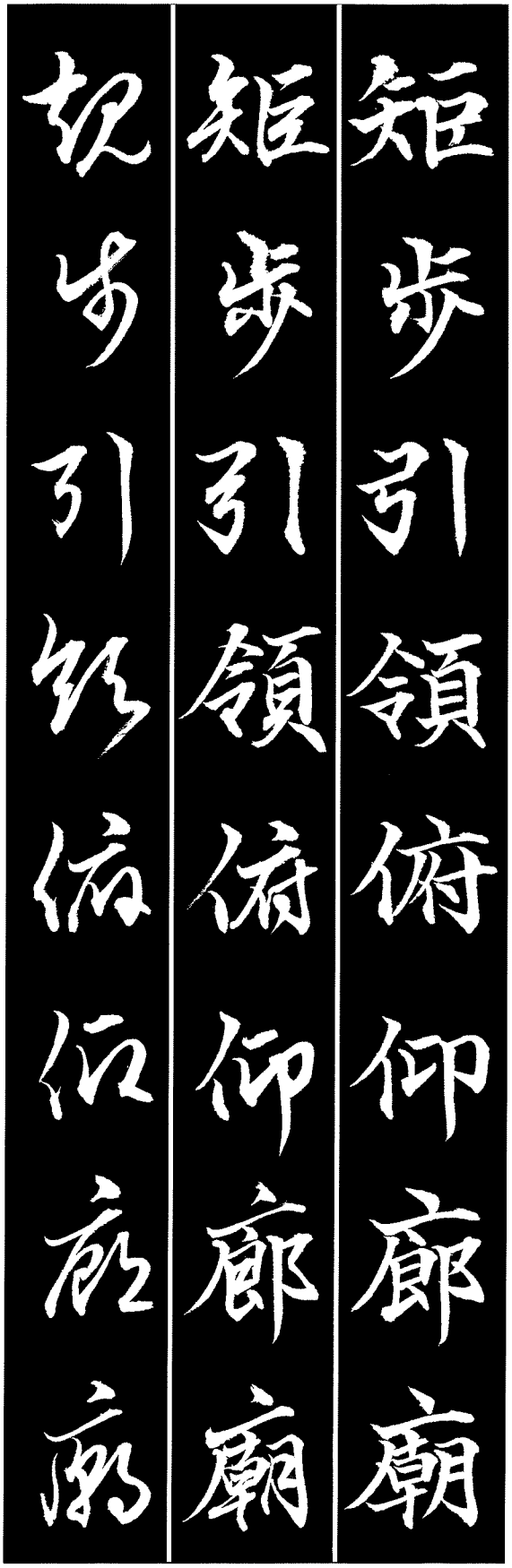
（両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと）

細字部昇格試験課題実施要項

・左記の三体千字文の一節を所定用紙に揮毫

・欄外に支部・段級・氏名を明記して下さい

・〆切九月三日（火）・受験料三、三〇〇円（税込）



佐藤象雲書

音　クホインリョウ　フギョウロウビョウ

略解　領は首。道を行くにも礼法に従い首を上げて歩むべきで、出入りには神前にいるように俯き仰ぎ礼儀をわきまえること。

※今月の月例出品は中止となります。

※一級以下の方の試験課題です。実施要項は四十二頁をご覧ください。

支部	順位	氏名

誰か世にながらへて見む書きとめし

跡は消えせぬ形見なれども

紫式部

和泉溪石先生書

※今月の月例出品は中止となります。

玄妙之境

■虞世南（ぐせいなん）・孔子廟堂碑（こうしびょうどうひ）（初唐・西暦六二九年頃）の臨書　(4)

玄妙の境

象雲臨

『玄妙之境』

唐時代は楷書の典型が確立した時代で、初唐の三大家、虞世南・欧陽詢・褚遂良といった太宗に仕えた能書家が相次いで輩出しました。その作品の殆どは太宗など朝廷の命よって建てられた碑のため、書家が持てる力量と全神経を捧げて書かれたものです。

三大家が没したあとも、これに倣って書かれた碑が多く存在します。欧陽詢の書風を受け継いだのは欧陽詢の四男、欧陽通です。また虞世南の書法を忠実に受け継いでいるのは、意外にも張旭です。今月の「古典を作品に活かす」でふれた狂草を得意とする張旭の残されている草書はその真偽不明なものが多いのですが、『郎官石記』は張旭の書と信じてよい唯一の書です。

虞世南の書に限らず、初唐の楷書は結体も然ることながら、各書家によって線性が大きく異なります。線の把握に努めて下さい。

■孫過庭・書譜（初唐・西暦六八七年）の臨書

(60)

疑うらくは是れ右軍の（製する所ならん）。……

象雲臨

『疑是右軍』

今月の四文字は前後半の二字では明らかに用筆法が異なっています。前半に文字は筆を直立させて筆先を利かせて運んでいるため、直線から曲線への筆先の転換が小気味よくリズミカルで連綿も無理がありません。しかも線同士でできる空間をつぶすことなく、筆路も明快です。

後半は新たに含墨しているようにも思われます。筆を横方向に動かすときに少し側筆気味にして線に厚みを持たせています。そして最後の軍の縦画は懸針と言われる縦画で、細線で鋭く引き下しています。腕が大きく動いていることが判り、また少しカスレを出すことによって筆勢を感じさせます。右軍は王羲之が右軍将軍だったことから呼ばれている別称で、孫過庭は王羲之書法を重んじる伝承者で、意識して特に強く書いたのかもしれません。